古の知恵を再認識したスペイン旅行
第７次外語会海外ツアー

角井信行（S昭36）

旅先の現地で３ヵ所８泊という長い外語会海外ツアーは初めてだそうで、総勢15名は機中泊も入れて5月25日から延べ10日間、マドリード、セビリア、グラナダ、バルセロナと回って旅を恙無く楽しく終えることができた。

マドリードでは外語会支部の加瀬氏（S昭47）、川又氏（S昭49）両氏にバレンシア料理店で最近のスペイン事情をお聞きし、こちらからは外語会の活動状況をご報告した。日本企業が経費削減のため日本人駐在員を減らしているという逆風の中にあって、この両氏がスペインを語られるときの目の輝きには深い感銘を受けた。

スペインと言えば、セゴビアに水道橋を作ったローマ人の時代から、西ゴート・サラセン時代、トゥール・ポワチエの戦い、イスラムの支配、大航海時代、無敵艦隊、米西戦争、市民戦争などと何度も世界史の舞台に立つ傍ら、アルハンブラに代表されるイスラム文化、エル・グレコ、ゴヤ、ベラスケス、ピカソ、ミロなどの画家、カザルス、セゴビア、ロドリゴ、イエペスなどの音楽家、セルバンテス、アラルコン、ウナムーノ、ガルシア・ロルカなどの文学者をはじめ、スポーツでもサッカーのレアル・マドリード、ゴルフのバリエステ・ロス、オラサバル、ガルシア、それに闘牛と、関心を引くものは枚挙にいとまがない。

８泊の旅行でこのうち何をどれだけ見られるのか、正直なところ不安があったが、30年もスペインに住みスペイン女性と結婚したという博識な日本人ガイド氏に恵まれたこともあって、予期以上の収穫があった。ガイド氏は、最近多額の現金を持ち歩く日本人が、不法入国したモロッコ人やアルジェリア人の襲撃の的になっているという警告をしながら、コロンブスのアメリカ大陸発見（1492年）やイギリスがスペイン無敵艦隊を破った（1588年）陰には、ユダヤ人の経済力があったこと、古都トレドの旧市街の道を細くして石畳にし2階の窓に植木を置いたのは、夏の暑さを和らげるために風の路を作り石畳の雑草や植木に水をやることによって気化熱を奪わせた古人の知恵であったこと、水が貴重品であったイスラムの人々はアルハンブラ宮殿造営の際に水を単なる風景として使ったばかりでなく、噴水の水音を変えて時計代わりにしたり、池の水面や濡らした大理石の床を鏡代わりに使ったりという知恵を出したこと、ベラス

ケスの絵を見る地点は一点しかないことなどを教えてくれた。

中南米に通算14年半勤務した筆者の目から見たスペインは、やはり母なる国だな、という感慨、すなわち新大陸に渡ったスペイン人はスペインをそっくりそのまま中南米に移植しようとしたのだな、という当たり前といえば当たり前の感慨を与えてくれた。同時に、あの運輸・通信の不便であった時代に、言葉はスペイン語、宗教はカトリック、町の造りは広場を中心に相似形の正方形を広げていくという統一したやり方をアメリカ大陸の南半分に築いていった強力な意思、情報収集力、伝達力を再認識した旅でもあった。

最後に、現地従業員との十数年越しの約束を果たすため、このツアーの後、パンプローナからサンティアゴまで730キロを歩きとおす１カ月の旅に出られた塚本氏（C昭34）のご完歩をお祈りします。